

<センター通信 4月号>

中津川市地域総合医療センター 高橋春光

春もたけなわ。新緑がまぶしく映える美しい時期となりました。今回は、皆さんもお聞きしたことのある認知症についてお話したいと思います。

認知症とは

認知症とは、脳血管障害、アルツハイマー病その他の要因に基づく後天的な障害によって、日常生活に支障が生じる程度まで認知機能が持続的に低下した状態を言います。加齢に伴うもの忘れと、認知症のもの忘れとは異なります。

認知症の最大の危険因子は加齢です。65～69歳での有病率は1.5%ですが、以後5歳ごとに倍に増加し、85歳では27%に達します。現時点で、我が国の65歳以上の高齢者における有病率は8～10%程度と推定されています。2010年では200万人程度とされていますが、今後高齢者人口の急増とともに認知症患者数も増加し、2020年には325万人まで増加するとされます。

原因としては、脳梗塞、脳出血、くも膜下出血などの血管性認知症、アルツハイマー病が最も多いです。その他、頭部外傷や内分泌疾患などによる認知症もあります。

認知症の症状は、①「中核症状」、②「周辺症状」に分けられます。

①「中核症状」には次のようなものがあります。

- 記憶障害: さっき聞いたことが思い出せない。覚えていたはずの記憶がない。
- 見当識障害: 時間や場所などの感覚が分からない。道順などが分からない。
- 判断、実行機能障害: 考えるスピードが遅くなる。前もって計画を立てることができない。
- 失語、失行、失認: 物の名前が出てこない。服の着方や道具の使い方が分からない。物を見ても何だか分からない。

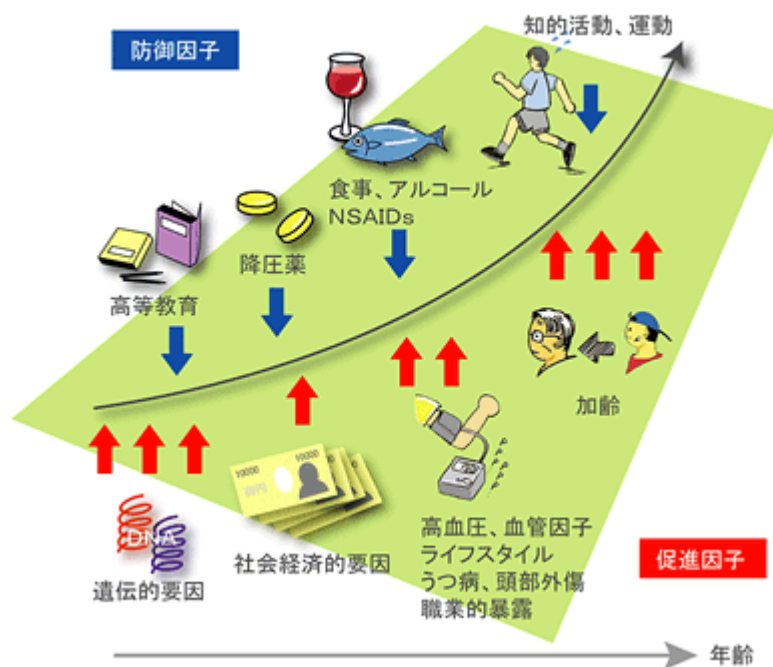
②「周辺症状」には、抑うつ、幻覚、妄想、徘徊などがあります。

早期発見、治療、予防について

治療可能な認知症は、早期発見と早期治療介入を行うことで、症状が治まったり軽くすることができます。血管性認知症には、生活習慣病(高血圧、糖尿病など)の予防や治療が有効です。アルツハイマー型認知症は、下図のように言われていますが、現在なところ完全な予防法はありません。より早期からの薬物療法で進行が多少抑

制できます。

図-2 アルツハイマー病の防御・促進因子



早期発見と早期治療介入により、本人が変化に戸惑う期間を短くでき、その後の暮らしに備えるために、自分で判断したり家族と相談できるようになります。また家族などが適切な介護方法や支援サービスに関する情報を早期から入手可能になり、病気の進行に合わせたケアやサービスの利用により、認知症の進行抑制が期待でき、家族の介護負担が軽減できます。

何か分からないことや心配なことがあれば、気軽にかかりつけ医やお近くの認知症サポート医にご相談下さい。